

先日とある雑誌の特集で、「(自分の人生の成功に)大きな影響を与えてくれた人物」というものやっいて、(むろん自他共に成功者と呼ぶ)有名人がいっぱいいていました。

そうしてその有名人たちは、(自分の人生の成功に)大きな影響を与えてくれた人物として、全員がやはり有名人を挙げていました。

ぼくはこれは、昨今はやりの「やらせ」だとかんがえました。

なぜなら、常識的にかんがえてそんなことはない。

影響を与えてくれた人物だとおもいこんでいるのは、じつは憧れていた人物とか、自分を引き立ててくれた人物とか、成功に貢献してくれた人物であって、そういうことは影響というものではない。

成功しようとしまいと影響というものは、もっとはるかに深く重いものであるとかんがえています。

だからここに両親や先生や友達はいってくるなら納得できますが、じっさいはいてくる場合も少々あるのですが、有名人ではない両親や先生や友達は絶対に(というか当然のことに)はいてこないのです。

なぜならとある雑誌の編集者は、有名人でない人物の紹介をしても、読者がつかない(売れない)と判断したからなのです。

こういう莫迦莫迦しい話が、この世界にはあふれています。

我が正宗白鳥は、「幼い時分に祖母からさまざまな怪異な昔噺をきかされたために頭脳の健全な発達を妨げられた」云々と書いていますが、頭脳云々はむろん謙遜として、影響とはこういうものであります。

よってここにぼくは、声高らかに宣言するのです。

自分の不成功に終わりそうな人生の、個人的に巨きな喜悅に大きな影響を与えてくれた人物は、織田信長でもなく、坂本竜馬でもなく、夏目漱石でもなく、松下幸之助でもなく、王貞治でもなく、無名人の懐爺であると。

怪談を祈りで語る懐爺や

+ 3 1 【ほしがる】

ぼくの村のいいところは、星がきれいなこと、空気がきれいなこと、女性がきれいなことです。

三つ目は冗談ですが、ぼくにとっては何よりも、懐爺がいることでした。

けれどもそれは、後々になっておもったことであって、その当時そうおもっていたかどうかは疑わしい。

いや当然そうおもっていたはずなのだが、それをそうと自覚し認識していたということはなかったはずです。

そしてそれが、ぼくにとっては、懐爺にとっても、よかった気がします。

それはともかく、一つ目の話。

星というものは、おばけみたい、とぼくはおもっていました。

きゅうに光ったり消えたり、つと大きくなったり小さくなったり、ふと白くなったり黄色くなったり。

それにとつぜん、流れたりしますから。

懐爺にそういうことを語った後で、

「あんなきれいなほしには、おばけなんかいないじゃろう」

というと、

「おばけは醜い、醜いのはおばけ、なんてのは、偏見（へんけん）というもので、本当はきれいなおばけのほうが多いんです」

「それは、はつみみじゃのう。ならば、ほしのおばけもいるんかのう」

「それはきつといますよ。星は無数です。将来宇宙旅行に行つて、行つた星におばけがいても、不思議どころか当たり前でしょう」

「わしは、うちゅうのはなしをききたいのじゃねえ。このちじょうに、ほしのおばけはいるんかと」

「地上の星のおばけですか」

さすがの懐爺もかんがえこんでいましたが、

「いましいました。流れ星のおばけで【ほしがる】ですよ。流れ星は地上に落ちると、隕石（いんせき）ということで、宝物にしたりする人

もいますが、たまたま、流れ星が人の上に落ちると、その拍子（ひょうし）に、【ほしがる】というおぼけに豹変（ひょうへん）します」

「【ほしがる】たあ、ものをほしがる、あれかのう」

ぼくはききました。

「当たりです。【ほしがる】が落ちた人間は、欲望がとてつもなく強くなる。なんでもかんでも欲しがる。他人のものでも欲しがるから、必ず問題が起きます」

「どろぼうなんかも、【ほしがる】かのう」

ぼくはききました。

「そうなのですが、泥棒よりたちが悪いのは、他人の奥さんを欲しがることですかね」

「それは、もんだいじゃのう」

「さらに問題は、【ほしがる】は伝染しますから、こんどは奥さんのほうが、旦那さん以外の男性を欲しがるようになります」

「それは、かけおちせにゃならんのう」

「金ちゃんは、よくそんな言葉をしっていますね」

「しらいでか。まちからかけおちして、このむらにくるもんが、おおすぎるじゃろが」

「そうなんです。この村は、町では〈かけおち村〉なぞと呼ばれています」

「せっかくかけおちしたのに、どうしてみんなわかれるんじゃろう」

「いいところに気がづきましたね。簡単にいうと、【ほしがる】は気が短いので、長続きしません。半年も経つと、どうしてこんな相手を欲しがったのだろう、どうしてこんな相手とかけおちまでしたんだろう、とおもいはじめるのです」

懐爺のいうとおりだとおもわれた。

「そういうもんじゃな。わしは、すもうの〈とちにしき〉のめんこがほしくてのう。やっとなににいたども、てにいたとたんに、もういらなくなってしまうた」

「そこが人間の厄介（やっかい）なところなんです。もしかすると、人間はみんな【ほしがる】の洗礼（せんれい）を受けていて、ただ落ちた流れ星の、大小の差だけなんじゃないかとおもうときがありますね」

懐爺のいうとおりでとおもわれた。

「そうじゃのう。わしも【ほしがる】の、せんたくをうけておるのう」

「洗濯ではなく洗礼ですが、似たようなものですから、まあいいでしょう」

「ならば【ほしがる】たいじは、むずかしそうじゃのう」

「不可能ではないですが、九分九厘（くぶくりん）困難です。退治したいなら、人間をやめなければなりません」

「にんげんやめて、おぼけになるのかのう」

「人間はやめられませんから、人間をやめたふりをするんですね。わたしのように」

「そうだのう。かいじいには、【ほしがる】はかんけいないのう」

「自分ではそうおもっていたんですがね、先日この裏の竹藪に入りましたらね。竹の子の小さな頭が地面からのぞいていました。その愛らしいことといたら。わたしはあのとき、その竹の子が欲しくなりました」

「わしだってほしいのう。わかいたけのこはうまいからのう」

ぼくはそれを一度だけ、村長さんの家で食べたことがありました。

「食べるためではなく、ただ欲しかったんですね。〈かぐやひめ〉を愛（め）でたいのと同じ気持で欲しかったんですね」

その気持はわからなかったけれども、

「よかったのう。かいじいもにんげんじゃのう」

「はい、よかったです」

懐爺は気持よさそうに笑いました。

正直いうとぼくは、懐爺は人間なんかであってもらいたくないと、わけもなく感じていたのです。